

## 編集後記

『創価教育研究』第3号は、創刊号や第2号の研究成果を踏まえ、本格的に「池田研究」に踏み出した内容となっている。巻頭言「池田研究への新たな地平」に提示された通りである。

「池田研究」の裾野は大変広いが、特別寄稿「池田大作先生と教育」、「池田大作先生の生命論」は、その一つの試みとして示唆に富んでいる。異なった価値観を有する学者が、この場合は中国の学者が、どこに注目をし、また各々の専門分野からどのようにとらえているのか等、大変興味深い。それとの関連で、研究動向「中国における『池田思想』研究の現状」や新刊紹介『東洋の智慧の光——池田大作研究』は、今後の「池田研究」を進める際におおいに参考になると思われる。

なお本年は、創立者池田先生の訪中30周年の佳節にあたるが、時間の経過に比べて中国における池田思想研究の広がりの大なるを痛感する。それは何故なのであろうか。巻頭言での「創立者の具体的な行動なのである」との指摘は重要であろう。「理念もしくは理論と実践の一体化」の視点よりの考察も有意義であると思われる。周恩来研究に長く従事してきたある学者が、「周総理と池田先生の共通点の一つは、行動の中に重要な思想・哲学が含まれていることです」と二人の実践に高い評価を与えていたことを想起する。

本号では、中国の学者の研究成果の一端を紹介したが、その他の国においても着実に進められている。今後順次紹介して行きたいと思っている。その意味からすると、資料紹介「池田大作著作翻訳出版目録」はますます重要となってくる。なお同「目録」は、それ自身が研究対象で、翻訳の頻度や言語別の翻訳種類等を分析しながら、池田思想の広がりを検討して行く予定である。

創立者は数多くの世界的識者や文化人と対話を重ねられ、多くの対談を書籍として残されている。これら「対話」研究も「池田研究」の重要な一側面であろう。池田思想研究に取り組んでいるある研究者は、池田先生の思想は「対話」を経る毎に発展し続けていると、その広がりや深さを大変に評価している。論文『『二十一世紀への対話』に臨んだトインビー博士の歩んだ道』は、『二十一世紀への対話』理解を深めるためだけでなく、「対話集」研究の新たな視点を提示している。

池田先生の価値観や思想が開花したのが「創価教育」といった識者がいたが、論文「創価教育学の基礎概念(1)」は、まさにその創価教育学に本格的に取り組んだ内容となっている。

本学の「建学の三指針」はその根底には、その「創価教育学」が基盤としてあるが、講演『『創造的人間たれ』を読む』、『『スコラ哲学と現代文明』を読む』、『『創造的生命の開花を』を読む』は、創立者の「使命論」、「大学論」、「学生論」、「教育論」、「人間論から生命論」等を通して、その関連が提示されているように思える。

本年は「創価教育学」の創始者である牧口常三郎先生が、戦前の政府が遂行した軍国主義的、国家主義的政策に反対し、殉教されてより60年目にあたる。パネル・ディ

スカッション「平和運動の源流を探る」は、その重大な意義を留めるために開催されたものの記録である。なお講演「柳田国男と牧口常三郎」、「人生地理学と中国」は、牧口研究の厚みを感じさせる内容となっている。

本号を編集している最中、本学にとって極めて光栄で栄誉な出来事があった。それは創立者が世界から第150番目の名誉博士・教授を受章されたということである。今年1月10日、ロシア連邦サハ共和国の北極文化芸術国立大学から、名誉教授称号が授与されたのである。これは世界的な快挙である。本センターは早速、150回の授章式での「授章の辞」と「謝辞」を収集し編集した。世界150の高等教育研究機関が各々の学術的視点で評価を下した結果としての150の「授章の辞」自体、「池田研究」の重要な側面であり、また一回一回の「謝辞」はまさに150の高等教育研究機関における記念講演にも相当し、池田思想を研究する上で貴重な資料となるであろう。

本号は「池田研究」に本格的に踏み出す上で、大変意義深い内容となったと確信する。「無量義は一法より生ず」という言葉がある。「一法」とは何かの探求をしながら、本号の成果を踏まえ、更なる地道な研鑽が不可欠であることを改めて痛感する。本号発刊に際し、貴重な原稿を執筆して下さった先生方、翻訳にご協力下さった先生方(加藤みどりグアナファト大学講師、川崎高志本学助教授)、細かい編集作業に携わって下さったセンター員の皆さん、また印刷を担当して下さった矢島印刷の皆さんに、この場をお借りして衷心よりのお礼を申し上げたい。(T. T)